碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可

神奈川　碩心会　発行

63年10月号（195）
発行者　根岸岳萃
編集者　中村愛岳

63年10月現在会員数

逗子地区	170名
葉山地区	281名
大船地区	58名
（合計）	（509名）

私と詩吟

戸塚支部　光岡　泰風

私は戦時中、先輩が時折丘陵に立って「繽は軍営に満ちて……」とか「山川草木……」などを朗々と詠じているのを聞いて、素晴らしいと思い、よく口ずさんだものですが、終戦後、何か現世に逆行している様に思っていました。

しかし、年輪を重ねるに従い、あの、はらわたに響く様な吟詠の魅力にひかれて、昭和四十四年一月碩心会に入り、今年で早くも二十年になりますが、未熟な私には、前途程遠しの感があります。

先日、逗子図書館ホールにおいて、秋期審査会が行われた時、入会して間もない年配の方々が真剣に朗詠されている姿に感動しました。審査終了後、安孫子先生は講評の中で、人間は誰しも音声が異なるので、人それぞれの味があってよいが、詩文を熟読玩味して、充分な心の余裕を以って、作者の意図を音調や余韻でいかに表現するか研究して欲しいといわれました。

心に余裕を以って朗詠するには、先生のご指導に従い、反復練習を積重ねて、己れに自信をつけることが肝要だと思います。

詩吟は、健康にもよいし、詩文を通して古きを尋ね、新らしきを知るためにも、私は「一日一吟」を励行し、詩吟を人生の伴侶として有意義に楽しく続けて行きたいと思っています。

◎行事予定

◇第22回葉山町文化祭　詩吟詩舞の会〔63年11月3日(祭)　葉山福祉文化会館〕

◇第38回逗子市文化祭　詩吟詩舞発表会〔63年11月6日(日)　逗子図書館ホール〕

◇県本部高段者（七段）研修会（八段）〔11月20日(日)（午前）〃（午後）　平塚農業会館〕

◇県本部高段者研修会（皆伝以上）〔11月23日(祭)　平塚農業会館〕

常任理事会議事録

日時　9月9日(金)6時30分～21時

場所　六代御前社務所

(1)総本部の「吟道」誌の配付について

「吟道」の配布事項は、業務分掌を変更し、

爾後広報部の所掌とすることとされた。具体的には、毎月横須賀第二地区長宅へ広報部で引取りに行き、各地区長は広報部長より受領して各支部へ配付する。

(2) 新入会員の硕心会費並びに県本部費の月割額の納入について

63年10月入会者より、別表の通り、入会月に応じ、総本部費と併せて入会届と共に、総務部長に提出、納入することとされた。

（従前、年二回、前期・後期に分けて徴収していたが、徴収後に入会した会員について、徴収不足が生じるためこれを是正するための措置）

(3) 皆伝会の創設について

皆伝以上の会員をもって「皆伝会」を創設することとなり、おって会則草案を作成し、常任理事会において検討の上、年内に発足させるべく準備することとされた。

(4) 会計帳簿証憑類の保存期間は、五年間と定める。

（総務部）

新入会員の硕心会費、県本部費及び総本部費の納入について

総務部
会計部

従来，硕心会費及び県本部費は，次の方法により徴収しておりました。

	（県本部費徴収月）	（硕心会費徴収月）
4月～9月（前期分）	5月末徴収	6月末徴収
10月～翌3月（後期分）	9月末 〃	10月末 〃

各会費共，徴収月時点の会員数を基礎にして徴収していた結果，徴収月後に入会した会員については徴収不足が生ずることとなり，これを是正するために，63年10月入会会員より，次の表により各入会月にしたがって会費を納入することとなりましたので，お知らせいたします。

なお，各会費は一括して合計金額を，入会届と共に総務部長に納入，提出して下さい。

新入会員の各会費納入額一覧表（一般会費）

（63年10月入会者より適用）

入会月	硕心会費	県本部費	総本部費	合計金額
4	※ 0	※ 0	※ 0	※ 0
5	※ 0	※ 0	1,000	1,000
6	※ 0	400	1,000	1,400
7	375	300	1,000	1,675
8	250	200	1,000	1,450
9	125	※ 0	1,000	1,125
10	※ 0	600	1,000	1,600
11	625	500	1,000	2,125
12	500	400	1,000	1,900
1	375	300	1,000	1,675
2	250	200	1,000	1,450
3	125	100	1,000	1,225

〔備考〕

1. 硕心会費　月額　125円
2. 県本部費（一般）　〃　100円（80才以上は免除）
   （中学生以下）　〃　20円
3. 総本部費　年額 1,000円（中学生以下，80才以上，身障者は免除）
4. この一覧表は一般会員の金額を示してありますので，会費減額者，免除者等については，各々読みかえて納入して下さい。
5. ※印……会費一括徴収月。
6. 4月入会者は別途一括徴収します。

奥伝合格（63年10月1日付）

339 野口紀風　361 行谷松風
363 知久萌風　368 西山蓉風
370 田中和風　371 渡部俊風
373 相多芳風　374 鈴木英風
376 行谷利風　377 佐藤由風
369 鈴木千風　372 相多秀風
375 角田嘉風　381 津久井好風
362 市原竜風

◎県本部審査課題テキスト

審査課題の一部が変更になったので、新テキストが出来ました。御希望の方はお申込下さい。（支部毎とりまとめ竹石方へ）

初段～八段迄分　（二百円）
皆伝以上　（二百円）

◎新バッジの発売

一般……グリーン
中学生以下…赤　　各千円

購入希望者は支部毎にとりまとめ、10月31日（指導者講習日）に現金そえ申込の事。

三国志と三峡下りを訪ねる旅（その1）

加藤岳相

我々が詩を吟ずる時に必要なことは、その詩文の内容をよく会得すると言うことである。今回県本部協賛による八泊九日のこの旅行に参加した所以も、漢詩の原点たる中国の風物に接し、少しでも今後の勉強の助けになればと言う考えからであった。

岡嶋岳凰先生を団長とするその他二十二名は、八月二十二日午前六時二十五分横浜天理ビル前をバスで出発、成田より日本航空にて十時十分上海へ、上空は晴天、富士山の噴火口が紫色によく見える。十三時十分上海着、三年前に来た時は改装中でごたごたしていたが今は立派に整備されている。上海も日本と同じ異常気象か雨模様、迎えのバスにて第一日目のホテルへ。

二日目は昔の大富豪の邸宅を公園にしたと言う古猗園、上海第一絹織物工場、作家魯迅の墓のある虹口公園、明時代の高官により造園されたと言う粋をこらした豫園等見学、夕食をすませ成都へ移動する為上海空港へ。予定時間より中国民航機は一時間遅れて離陸、成都のホテルに到着したのは午前一時であった。

三日目、昨夜遅かった為、今日の観光コースの出発は遅く十時三十分。先ず三国志で有名な蜀の劉備、諸葛孔明等を祀る武侯祠、太い竹を髪の毛のように細く裂いて加工する竹細工工場、安祿山の反乱後、詩人杜甫が住んでいた杜甫草堂、此処は武侯祠と共に五十九年にも観光しているので懐しく感じられた。唐代の詩人薛濤（セツトウ）を記念して作られた錦江のほとりにある望江楼公園を見学して三日目は終了。成都の街も前回来た時に較べ発展がいちじるしく、大きなビルがあちこちで建設中であり、街も奇麗になった感じを受けた。我々の宿泊したホテルも前回来た時には野原であったが今年の四月に開店したばかりとか。

四日目、中国民航機で成都より重慶へ移る為早朝にホテル出発、表はまだ暗い。朝食は弁当、民航機のフライト時間十二時五十分が七時三十分になった為である。然し実際には一時間半位遅れる。九時三十分重慶着、迎えのバスで最初の見学場所桂園へ。第二次世界大戦終了後、毛沢東、周恩来、蔣介石の三者が平和的合作を協議した場所とか。北京の天壇に似た大きな建物が見え、今夜泊るホテルである。外観内部の設備とも今回の旅行で泊ったホテルの中では一番良かった。昼食後市内観光、長江重慶大橋、長江を眼下に眺める枇杷山鷲嶺公園、書画美術館等。重慶は山が多く市街も起伏が多い。その為中国の他の都市ではあれだけ多い自転車が殆んど見られない。長江の両岸に聳え立つ市街の建物、日本の鬼怒川を想い出される風景だ。又重慶は霧の町と言われ霧が多いとか、山が多い故だろう。

練吟メモ

教本

○先ごろの大会に、良寛の「半夜」を独吟した人がいた。高齢者ではあるが、筆者は彼を何かの折に記憶していた。接待所で湯茶のサービスを受けていると、折よくその人が見えた。「私はこういう者ですが、先ほどのあなたの吟は、感情が出ていて大変結構でした。ところで、あなたは転句を（山房五月黄梅の雨）と吟じられたが」と、ここまで言ったところ、即座に「新教本のとおりにしました」との答が返った。

○筆者はわが意を得た回答としてうれしく思った。ご承知のとおり旧教本は「五月」であった。長年なじんできた詩句であるので、愛着があって簡単には捨てられなかった。字典を引いても、ゲツとガツの二つの読みはあるが、この詩に限っても、もう一八〇年くらいの洗練は受けているわけである。では、教本は「月」の訓みをどう扱っているのであろうか。例示して見よう。

○句の上の数字は新教本の巻数を示す。月をガツと訓んでいる句

二　霜葉は二月の花よりも紅なり

三　山房五月黄梅の雨

三　涼秋八月蕭関の道

四　二月の梅花洛城の東

月をゲツと訓んでいる句

二　烽火三月に連り

三　家を離れて三四月

三　青春二三月

○右の例句からすると「ガツ」と訓むのは暦の月数を呼称する場合であり「ゲツ」と訓むのは月日や歳月を意味する場合に使われているようである。ところで「ゲツ」の場合の教本の（通釈）を見ると

二　戦いは長い間続き

三　都の家を離れてからはや三、四か月

三　陽春の二月、三月の頃ともなれば

右の通釈のように、二・三例は歳月や月日を詠んでいるが、「陽春の二月、三月」は暦の月であり、慣例の区分が崩れている。

○筆者がここで申し上げたいのは、吟詠上の漢詩や短歌、俳句等の訓みは、すべて教本どおりとするのが本筋であろうということである。例えば、漢詩の場合の「たとえ」と（たとい）、「人間」と「人間」や、俳句の「はえ」と「はい」など。指導者は、これらの訓みの見解を述べるのは結構だが教場での指導は、総本部が訓みの許容制を採用していない以上、あくまでも教本どおりとするのが、組織の中にあるものの当然の指導姿勢であると思うのである。

（入　会）　（番号は新名簿番号）

504 佐藤牧泉(再)葉山町一色三九〇
（滝の坂）(電)〇四六八－七五－一八二四

505 鉄本亜矢子　逗子市久木七－一五〇六－六
（真　澄）(電)〇四六八－七三－六九〇三

506 大庭幸子　葉山町一色一六六六
（一色A）(電)〇四六八－七五－〇七七五

507 鈴木裕子　葉山町一色一九七二
（〃）(電)〇四六八－七五－一一〇四

508 須藤登久子　葉山町一色二一八五
（〃）(電)〇四六八－七五－七二六九

509 高野栄子　葉山町一色二三五二
（〃）(電)〇四六八－七五－八三九二

510 行谷光山(再)葉山町一色九四五
（〃）(電)〇四六八－七五－二五四七

511 守谷昇風(再)葉山町一色一九七八
（〃）(電)〇四六八－七五－一八二八

512 八坂香野子　葉山町一色一三七八
（〃）(電)〇四六八－七五－一九九三

513 鈴木深山(再)葉山町堀内三五〇
（堀内・D）(電)〇四六八－七五－一七二九

（退　会）

139 唐鎌正風（吟　甫）

227 矢島昌山（堀内・F）

145 武藤薫風（松　和）

277 鈴木蒼山（平　松）